平塚らいてうの会ニュース

発　行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

◎新年にあたって

「永遠に失望しない」ために―学び、考え、語り、行動を

日本と世界の平和のために

昨年は、平塚らいてうが結成を呼びかけ初代会長を務めた日本婦人団体連合会（婦団連）創立70周年でした。70年前といえば、１９５０年に勃発した朝鮮戦争が継続し、日本は「国連軍」の名で戦争に介入した米国の前進・出撃基地とされていた、再軍備と反民主主義「逆コース」の時代です。

51年にサンフランシスコ講和条約と日米安保条約締結、日本は形の上では主権国家となりましたが、米軍基地と軍隊駐留は継続され、米国の従属国として生きる道筋がつけられました。

米国が単独講和を急ぐのを見たらいてうは50年6月、全面講和を訴える「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」を野上弥生子ら5人の連名で、市川房枝の陰の尽力も得て発表し、ダレス米国特使に手渡しました。この行動の後、らいてうは、日本と世界の平和のための精力的な活動を生涯続けることになります。

女性の平和勢力を大きく一つに

52年7月、国禁とされていたソ連・中国を訪問した高良とみ参院議員の帰朝報告婦人大会が盛大に開かれ、これが婦団連結成のきっかけとなりました。報告会の挨拶でらいてうは「これを機会に、在来のセクショナリズムを捨てて女性の平和勢力を大きく一つに結ぶことが今できますならば、それは本当に素晴らしいこと」と訴えます。この呼びかけに応え、翌53年4月、婦団連結成、らいてうは初代会長に推されました。結成趣意書にうたわれたのは、戦争を防ぐ、女性の権利を守る、女性の国際連帯などで、今日の女性運動にしっかりと受け継がれています。

「永遠に失望しない」ために

そして70年後に迎えるこの新年　――一つの戦争が終わらぬうちにもう一つの戦争が始まり、刻々と尊い命が奪われ、人としての権利が崩壊させられている現実を、私たちは受け止めなければなりません。「新しい戦前」とも言われる現政権の大軍拡、憲法破壊とのせめぎあいが続いています。

「わたくしは永遠に失望しないでしょう」と、らいてうの自伝は結ばれています。今日の日本と世界で「失望しない」ために、私たちは学び、考え、語りあい、そして行動しなければなりません。その意味で、婦団連70周年記念のつどいでらいてうと市川房枝の交友について語られた林陽子さんを、らいてう講座にお招きできることは誠に喜ばしく、今から2月の講座が待たれます。

（代表理事・婦団連元会長　堀江ゆり）

らいてう講座

2月17日（土）13：30～16：00

平塚らいてうと市川房枝が求めたものは今
ジェンダー平等
日本の遅れはなぜ？
打開策は？

講演　林陽子さん
市川房枝記念会女性と政治センター理事長
弁護士・元国連女性差別撤廃委員会委員長

会場　新日本婦人の会中央本部
参加費　会員500円／未会員1000円
定員　50名（先着）
申し込み　FAXまたはEメール
TEL&FAX=03(3818)8626
E-mail=raichou@nifty.com

森のめぐみ講座　10月9日

菅平高原の開拓について

講師　坂口益次さん

真田町郷土史研究家の坂口さんは、らいてうの家が菅平地籍にあることから、会員の皆さんに菅平に関心を持ってほしいと今までいろいろなお話をしてくださいました。その一つに脇街道である大笹街道（須坂側から登ってきて、根子岳、菅平を通って鳥居峠に抜けていく道）についてのお話があります。現地に行って当時の様子を振り返る学習は意義あるものでした。

今回は菅平の開拓に焦点を当て、縄文以来、どのように開拓されてきたかというお話でした。15名の参加者は熱心に聞きました。

縄文から平安時代

縄文からこの地に人が住んでいた事は、中の沢洞窟、唐沢洞窟の遺跡や土器から分っています。水が豊富で自然豊かな土地であったため、狩猟採集ができたのでしょう。しかし、夏場だけで冬の厳しい環境では定住できず、下へ下りていたようです。菅平は平均気温6・6度と、稚内と同じで、夏は冷涼、冬の寒気は厳しいものがあります。坂口さんはかつて菅平中学校に勤務されていた3年間、生徒と気温の定点観測をして長野気象台に報告していました。ある日マイナス20度以下に下がったことを報告すると、それは間違いだと言われたそうです。気象台では川上村と対比していて、川上村より低くなるとは思っていなかったようでしたが、その後、アメダス観測により正しさが証明されたそうです。

それほど寒い所ですから、縄文以後、江戸時代まで定住者はいないとされてきましたが、平安中期頃のかまど、掘立柱の穴など住居跡が発見され、伊勢神宮にしかない須恵器で祭事に使う土器も見つかっています。朝廷に馬を献上していた望月氏との関係や山家神社に関係ある人たちが、菅平へ移り住んだのではないかと考えられるというお話でした。

江戸時代の開拓

松代藩真田信之にあずけられていた、加藤清正の家臣加藤丹後守道句（光）が、菅平の沼平に鍬を打ち込んだのが、開拓の最初だそうで、菅平の祖として、道光神社に祀られています。寛永元年（1624年）からの240年間は開拓しても出稼ぎ程度で定住した文書はなく、嘉永元年（1848年）に鰻沢・下平の両家が移住してきたのが始まりです。薬草試作のため、嘉永6年（1853年）上田藩主松平伊賀守が17戸47人を移住させて本格的な開墾が始まり、麻、粟、ソバの栽培、馬鈴薯から芋粉の製造をしていました。

明治・大正・昭和前期の開拓

明治になって、デンプン、ソバ、炭などを収入源としてきましたが、養蚕を始めたことにより、開拓が大きく広がりました。春の晩霜により、ウジバエが皆無である事、夏が冷涼であることにより、桑の葉が軟らかい事を利用して、蚕種製造と三眠まで飼育した稚蚕飼育を行いました。高冷地であるという養蚕にとっての悪条件を逆に利用して開拓は広がり、大正時代まで続きました。その後蚕種業は衰退し、繭生産に入り大正7年（1918年）には耕地の2分の1が桑畑となりましたが、繭価の暴落により昭和32年（1957年）までの70余年で消滅し、換金作物として、燕麦と種馬鈴薯生産に移っていきました。

長野県青年講習所

軍国主義教育へ向かい、大正14年（1925年）軍部は、中等以上の学校に現役将校を配属するとともに、各県に海外発展を担う青年を養成するための青年講習所を設置しました。長野県青年講習所は菅平に開設され、入所した22名の生徒たちは百坪の開墾を3、4日で仕上げたそうです。

お話を聞いて、菅平の開拓は、厳しい条件を逆手にとって、うまく土地利用してきたと感じました。現在も、涼しさと高地性を生かし、レタス栽培が広がり、陸上、ラグビーのメッカとして発展し広がっています。これからもどのような開拓をしていくのでしょう。

（倉橋純子）

元副会長・現理事

折井美耶子さんの逝去を悼む

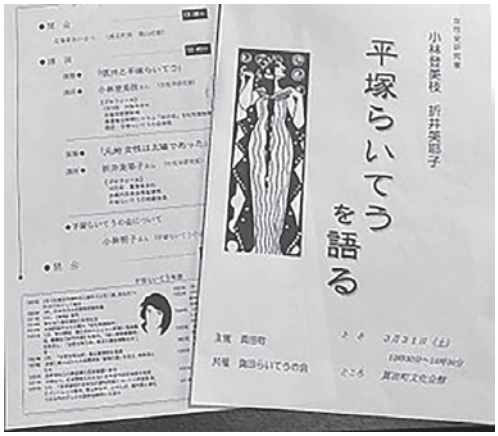
2017年５月28日　らいてう講座
（於らいてうの家）

秋も深まり立冬も過ぎた頃、折井美耶子先生のご逝去のお知らせを頂きました。この８月には先生より「この夏には皆様にお目にかかりたいと思っておりましたが体調を崩しまして残念ながら長野に行くことは出来ません。皆様によろしくお伝えください。」とのお便りをいただいていました。来春にはらいてうの家においで下さると信じて、お逢い出来ることを楽しみに致して居りました。残念で悲しいお知らせでした。

折井先生との出会いは、平塚らいてうの記念館建設予定地として四阿山高原の雑木林を視察するという２０００年６月６日の信濃毎日新聞の報道に始まります。一万一千余りの人口の小さな町にと驚きと疑問もあり新聞社を通して、小林登美枝先生とお話しすることが出来ました。とても嬉しいお話に町当局に話を通し、２００１年３月31日小林登美枝先生、折井美耶子先生、小林明子さんを迎え、真田文化会館にて、「女性史研究家、らいてうを語る」の講演会を開催しました。折井先生は「元始女性は太陽であった」を語って下さいました。会場は地域の方々と長野市、松本氏からの皆さんであふれ、大盛況。

講演会の後、車で春まだ浅い四阿山高原の雪の舞う建設予定地の雑木林にご案内しました。小林先生が思わず「何と美しい、らいてうの魂が下りたつわ。」「此処は女性の聖地となるでしょう。」と。その時、折井先生はその雑木林に舞う雪の景色をどうご覧になられたことでしょう。その日の宿泊は予定地のすぐ隣のあずまや高原ホテルにご案内し、お疲れを癒して頂きました。

何時のことでしたか、折井先生が勉強不足で疑心暗鬼の私に「貴女がこの家の建設の始まりなのよ。自信をもってやりなさい」と、私の背中を押して下さいました。また、小林先生には「地元の力が必要なのよ。」とお話を頂いておりました。私達の町にはすばらしいらいてうの家が存在する事を誇りにし、私は、会員の皆と頑張って参りました。３人の先生方が最初に真田町においで頂き信州とらいてうを語ってくださいまして感謝致しております。



2001年　講演会プログラム　於真田町文化会館

折に触れ励ましてくださった折井先生のことを忘れません。**（真田らいてうの会元会長　花岡静枝）**

＊

去る11月11日の折井美那子さんのご逝去は、５月の総会にはお元気な姿で出席されて積極的に発言もされていましただけに今も信じられない思いでいます。

ご存じのように折井さんは、生前のらいてうさんと70年安保に反対する成城のデモに参加されたのをはじめ、らいてうさん没後に発足した「平塚らいてうの会」の主要メンバーでした。１９９８年の茅ヶ崎に平塚らいてうの碑の建立、２０００１年に羽田澄子監督による記録映画「平塚らいてうの生涯―元始、女性は太陽であった」の作成、２００６年に完成した平塚らいてう記念館「らいてうの家」の建設に当初から参加されるなどして、一昨年まで、平塚らいてうの会の副会長としての重責を担っていらっしゃいました。らいてうの家がオープンしてからは、常設展示パネル「らいてうの生涯」、また、ほぼ毎年更新されたテーマごとの特別展示パネルの作成の中心になって推進され、らいてうの家での「らいてう講座」の講師としてコロナの時期以外は毎年講演されました。

折井さんは、また、女性史研究者として多彩な活動をされました。らいてう研究者として「らいてう研究会」、「女性の歴史研究会」等のまとめ役をされて、多くの女性研究者の共同研究の成果として、わたしたちがらいてうを知る手引きとなる『青踏人物事典』、『新婦人協会の研究』、『新婦人協会の人々』、『写真集　平塚らいてう―人と生涯』などを出版されました。また、「地域女性史研究会」の代表を務められるなど地域から女性自身が研究を積み上げることに尽力され、多くの女性研究者と共同の仕事を組織される非凡な力をお持ちでした。御著書『地域女性史への道』のあとがきの「暮らしの隅々からジェンダーの視点で歴史を見直すことによって、大文字の歴史が書き直されることを、そして若い人々が研究に参加し継続してくださることを切に願っています。」の言葉が心に残ります。

折井さんとご一緒した思い出は多いのですが、『紀要』14号に載せたらいてうの「１９２９年日記」の読み下しに苦労しながら、読み下せた時の喜びを共有させていただいたことが忘れられません。もっといろいろな資料を一緒に読みたかった。また、折井さんが、『紀要』に執筆されようとしていた「らいてうと俳句」、「らいてうと成城」がご逝去によって不可能になったことは取り返しのつかない損失に思われ、深い喪失感に襲われます。人とのつながりを大切に、地道な研究を積み重ねられた折井さんにこれからも学び続けていきたいと思っています。折井さん、ありがとうございました。

（三留弥生）

『紀要』15号刊行

《主な内容》

・近世～近代日本における売春観の変容について
　国立歴史民俗博物館名誉教授　横山百合子
・『青鞜』と茅ヶ崎
　茅ヶ崎ゆかりの人物館運営アドバイザー　大島英夫
・愛の故郷～茅ヶ崎から見るらいてう
　代表理事　三留弥生
・らいてうと博史―今日の視点で考える「新しい女」と「新しい男」
　代表理事　堀江ゆり
・熱海・伊豆山から東京・千駄ヶ谷へ～「大正12年日記断片」から見るらいてうと家族
　代表理事　三留弥生
・戦禍の記憶―学徒動員と東京大空襲
・果ての旅路に思う
　源氏物語研究者　宮島満里子

申し込みはらいてうの会へメールかファックスで。
一冊７００円・会員５００円　送料及び振込手数料は負担して頂きます。

〈声明〉
「イスラエルはガザのジェノサイドをやめよ　即時停戦を求め、連帯して行動を」

2023年11月21日、平塚らいてうの会は、イスラエル軍によるガザ地区への大規模攻撃に関し、らいてうのこころざしを受け継ぐ立場からの声明を発表し、イスラエル大使館に送付しました。全文はホームページをご覧ください。

【事務局日誌】

10月8日　森のめぐみ講座　庭の笹刈り、草刈り
10月9日　「菅平高原の開拓について」講師・坂口益次さん
10月26日　第２回代表理事会（オンライン併用）
10月28日　婦団連創立70周年記念のつどいとシンポジウム（於全労連会館）
10月31日　らいてうの家　大掃除・水拭き
11月1日　ワックス塗り・反省会・展示収納作業
11月2日　展示収納作業
11月30日　展示資料を真田公民館に預ける
12月9日　らいてうの家冬期休館
12月11日　東京らいてう講座担当者話し合い
12月21日　第４回理事会（オンライン併用）
第16回「平塚らいてう賞」贈賞式（於日本女子大学新泉山館）
講座について林陽子さんと打ち合わせ
第３回代表理事会（オンライン併用）